

長野県で夏秋どりいちごの栽培が増えている理由？ 野菜花き試験場

長野県では、夏の冷涼な気候を活かして、7～10月に出荷される夏秋どりいちごの栽培が年々増加し、平成25年には約15haの栽培面積となっています。

近年、いちごの旬は冬から春にかけての季節が定着し、年間を通じてこの時期の需要が最も多く、市場に大量に出回りスーパー等のフルーツ売り場を占有しています。クリスマス等の行事が需要につながっている側面もあります。このように、一般に流通している生食用いちごは「一季成り性品種」と呼ばれ、低温短日条件で花芽をつける性質があります。反対に、高温長日条件となる5月以降には花芽をつけないため、夏から秋にかけては生産できなくなってしまう。

一方、ショートケーキなどの食材として欠かせない業務用いちごは、量は少ないものの年間を通じて確実な需要があり、特に、夏秋期のいちごは国内での生産が難しいことから高値で取引されています。そこに目をつけて注目されているのが、高温長日条件でも花芽をつける性質を持つ「四季成り性品種」です。これらの品種は、古くからその存在が知られていたものの、味が悪い、収量が少ないなどの理由で、ほとんど栽培されていませんでした。

そこで、長野県では、平成13年頃から夏の冷涼な気候を活かした夏秋どりいちご栽培が始まりました。さらに、平成15年には南信農業試験場（下伊那郡高森町）が「四季成り性いちご」の「サマープリンセス」を育成したことがきっかけとなって、その頃から徐々に栽培面積が拡大し、県全体で15haを数えるまでに増加し、今日では本県オリジナル品種の「サマープリンセス」と、民間（種苗会社）で育成された「すずあかね」が主として栽培されています。

ところで、県が育成した「サマープリンセス」は、その優れた品質で市場から高い評価を受けていますが、9～10月に収量が減少することや、果実の着色がよくない現象（白ろう果）が発生するなどの問題を抱えています。このため、野菜花き試験場（塩尻市）では、こうした欠点を克服できる新たな「四季成り性品種」の育成に取り組んでいます。



果実品質の良い四季成り性
いちご「サマープリンセス」



高設ベンチによる
「サマープリンセス」栽培

担当者	山口 秀和	電話番号	0263-52-1148
-----	-------	------	--------------

[試験場だより・知って納得情報へ](#)

[野菜花き試験場ホームページへ](#)